

## 「自由とキリスト」

聖書箇所：ヨハネ 8：31～47

昨夜、横浜のバンド「イマリトーンズ」の演奏を聴いた。そこで自由の語源についての画期的アイデアを知った。自由とは **Jesus Loves You** → ジーザスラブズユー → ジーらあユー → ジュー → 自由、というものである。単なるだじゃれと笑えない、誰も自由がイエスの愛から発生してきていることに気づいていないからだ。

アメリカに自由の女神像がある。女神と言っても偶像ではない。自由の象徴、アメリカが最も大切にしている価値観をあの像が象徴しているのだ。そのアメリカは独立宣言で自由を高らかにうたっている。生命、自由、幸福追求は誰にも平等に与えられる自明の真理である、と言う。日本も同様に憲法 13 条には生命、自由、幸福追求の権利が定められている。

しかし、自由とはいったい何か、デカルトは情念から解き放たれて自由に生きることを説明した。しかし、今の日本では情念、つまり欲望に従って生きることが自由であると考えられている。罪の概念が西欧ほどには明確になっていないからだと思う。

「真の自由とは、情念＝罪から解かれ、主に与えられた人生を喜びを持って生きること」にある。こういう話は教科書に時々載っていて、自由のはき違えをするな、とか自由には責任がともなうとか、言われて教え込まれてはいる。情念オンリーの自由に制限をかけるために日本国憲法では「公共の福祉に反しない限り」などという但し書きをつけた。では公共の福祉とは何か、それはいわゆる空気である。空気を読んで幸福追求せよという。日本人なら誰でもわかることになっているが、外国人にはわかりにくい。情念から自由になるために空気を読み、というのである。つまり日本では生命、自由、幸福追求は空気を読んでからしなさい、ということになる。「みんなに迷惑だろ」「そんなことしたらみんながどう思うか」「普通と違うだろ」「それを言っちゃおしまいだよ」、書いてるだけで暗くなってきた。これが日本の自由の実態か、と思う。すなわちきわめて暗い自由である。

じゃあ日本以外はいいいのかと言えば、これもあやしい、アメリカにいけば金がないと不自由だし、ロシアに行けば政府に文句いえば不自由だ。中国にいけば高級な役人以外は不自由に感じるかもしれない。人間が存在する以上、罪という抵抗勢力がいつもいつもあなたの自由を奪おうとしている。

自由ということばはあっても、自由を生きることはほぼ不可能に近い。

ある日本人が自由を求めて、国を出た。しかし、最終的にアマゾンのジャングルで人を拒絶して生きることになり、ことばを失った野人となってしまった。それでも彼は幸せなのかもしれない。しかし、何か大切なものを失った。バビロン帝国の王ネブカデネザルは力、富、名誉をすべて自分のものにした。絶対権力者、彼をとどめるものは何もない、その地位に立ち、自分の威力、栄光を自分に帰した瞬間、野人となり7年間鎖につながれ、理性を失った。彼も何か大切なものを失った。

自由は大切、自由はすばらしい。確かにそうだと思う、しかし、自由には「目当て」がなければならない。それは何か。「愛」である。あなたの隣人を愛せよ、これは最高の律法とされている。しかし、これは私たちが自由を手放さない、奪われないための指針なのだ。

そして、そのために「主を覚えよ」と言われる。聖書を通して、祈りを通して、聖餐式を通して、主の愛に触れよう。それによってあなたのうちなる人は磨かれ、清められ、主の愛に敏感になる。「愛の目当て」、これなくして自由は保てない。

そしてこの主の愛はまず主から一方的に与えられた。こういう観点で今日の聖書箇所を讀んでみよう。そして主に感謝しよう。